

---

# ミュータント・ウォー

凱旋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ミュータント・ウォー

### 【Nコード】

N9593W

### 【作者名】

凱旋

### 【あらすじ】

ヒロがタカとチャットで話していると、まさかの介入者！

ハッキングか！バグか！いや、それとも・・・

しかも、超能力者になれるとかどうかで、

でも、なる過程で死ぬとかどうか、

まったくわからないまま、とりあえず、やるっきゃないヒロ

そんなヒロにのせられるがままになっていくタカ

二人の戦いはどうなっていくのか！？

それ以前に、能力者になれるのか！

## 1 はじまり

- 少年の部屋 -

カタカタ キーボードを叩く音が部屋に響く

「ふあ〜」アクビをするとまたキーボードをうちだす。

俺の名前は、さとう佐藤 ひろと博人

みんな（ネット世界の人々）には、ヒロ（ハンネ）と呼ばれている

今日はふつうに学校のある、ふつうの火曜日

ふつうに勉強をし、ふつうにダベリ、ふつうに遊ぶ、普通の日

だが、

俺は違う、俺のふつうとは、

家に居て、朝起きてから、夜ねるまで、生きていくために必要な飯  
とかを除けば

全てPCをいじる日々

今日もPCを使い、ネットで、チャットやら、RPGやらをやっている

- チャットにて -

ヒロ【学校だるくて行ってらんない】

タカ【俺もだよ、人生楽しまなくちゃ】

タカとは、俺のネットで知り合って、1回オフ会した友達である。  
本名不明

ヒロ【そういえば、最近楽しいことないな】

タカ【うん、俺もだよ】

ヒロ【ゲームみたいに超能力使えたらなw】

タカ【だなw】

??【そんなこと、できますよ】

タカ【!?!】

ヒロ【え？俺達以外にいないはずなのに】

??【私は超能力・・・異能を使ってここにきています。】

??【私の言うとおりになれば使えなくもないです】

タカ【使えなくもって、使えない可能性もあるのか】

??【はい。使えない、つまり覚醒しなかった場合は、死にます。】

タカ【!?!】

タカ【だったらやんないほうが良くないか?】

??【やらないのならば、私はもう、あなた達の前に現れることは

ないでしょう】

ヒロ【お、俺はやる】

タカ【正気か!?!】

ヒロ【可能性があるならばやる。おもしろそうだしな】

タカ【お前がやるなら俺もだ】

ヒロ【っで、どうすれば?】

??【とりあえず、明日、ここに来てください、その後指示します】

ヒロ【わかった】

タカ【了解だ】

・ここから二人と一人の少女の物語が始まる・

## 1 はじまり（後書き）

この続きは、これを投稿した時点で、うかんでないのとFWOの各順番が俺に回ってきてしまったので遅れます。今後もよろしく

ちなみに、この作品は1人で書いていきます。

## 2・ミュータンツ・ウォー説明

- 博人の部屋 -

「はあ〜」ため息をつき、PCの電源を消すと同時に座ったままの椅子を後ろに滑らせる

（超能力か、本当にそんなものあるのだろうか、もしかしたらさっきのだって、バグか、ハッキングかもしれないし）と

天上に貼ってあるFPSのゲームのポスターを見ながら、考える

（とりあえず、明日の朝、タカとチャットで会って、考えるか）その後、数秒間 ぼー っとしてから、ベットに横になり、そのまま寝に入る

- 翌日の朝 -

「ん、ふわぁー・・・！？ パ、パソコンが起動してる！」  
あわてながら、とびつくようにPCを見ると

- チャット内 -

?? 【ようやく起きましたか】

ヒロ【な、なんで、いや、どうして勝手に、そもそもなんで起きた事を！？】

?? 【昨日言ったはずですが、超能力を使っってきていると】

タカ【うお！？そ、そういうことだったのか、】

?? 【ようやくタカさんも起きましたね、では説明しましょう】

ヒロ【なにを？】

タカ【なにを？】

?? 【まずは、私の自己紹介をしましょう】

?? 【私は、リコ と言います、能力は、機械類や電気を操作でき

る能力です】

??【まあ、メカトロマスター と私達の間では、呼ばれています。】

タカ【め、メカトロマスター、】

??【はい、では、説明します。】

??【私達、超能力者 正確には、異能者 ミュータントとも呼ばれます】

??【異能者達は、今 いえ 昔から、2つに分類されています】

??【1つは、私が所属している、ヒューマノイド軍 ヒューマ】

??【ヒューマは、覚醒に成功した異能者が属していて、】

ヒロ【ちょ、ちょっとまって、】

??【どうしたのですか？】

ヒロ【俺達は、超能力 いや 異能者になれると聞いたからなりた  
いと言ったけど、】

タカ【そうだ、2つに分類とか、軍とか、そういうんじゃないんだ  
??【すいません、言い忘れてましたが、私達の軍は人員不足な  
です】

??【もう1つの軍 アニマノイド アニマ】

??【アニマ には 覚醒失敗に近い状態までいって覚醒した 意  
識を制御できない暴走した異能者が属しています】

??【アニマは、指導者がいて、そいつが、暴走した異能者を制御  
しています】

タカ【そいつもアニマノイドなのか？】

??【いいえ、ヒューマノイドです】

ヒロ【なんで、ヒューマノイドが、アニマノイド軍の指導者に？】

??【それは、誰もわかっていません】

ヒロ【そ、そうなのか】

??【つまり、暴走 多勢 指導者 の3つがそろった敵に勝つに  
は、それ相応かそれ以上に人数が必要なのです】

ヒロ【そうか、よし、仲間になろう】



タカ【そうだな、俺もなるよ】

??【ありがとうございます それでは、あなたがたを研究室につれていきます】

??【目をつぶっていてください】

- 二人とも目をつぶった そして、PC画面から強い光がでて、飲み込まれた -

## 2・ミュータンツ・ウォー説明（後書き）

久しぶりに書きました

??（リコ）の説明が長かったかもしれませんが、呼んでくれて、ありがとうございます

今回は遅くなりましたが、次回は、早めに書きたいと思っています。あと、なんか、俺てきに、それでも文字数多いかな?と思ったら、全然少なかったので1万文字は、いきたいと思っています

次回は、とうとう ヒロとタカが覚醒できるのか否かが、わかるので、  
次回も、というか、今後とも よろしく

## 覚醒するんじゃない？するの？

- 研究室 -

「ん、んあ、んぷ！」

二人とも吐き気がして、飛び上がるように起き出す

「やっと起きましたか」

誰かの声が聞こえる

「吐き気がするのは、我慢するか、向こうにあるトイレで・・・」

言いかけたときには、二人ともトイレへダッシュ！

「はあ、やつぱりだめかあ」

実は、リコのは、メカトロマスターの技を極めて、テレポトさせる技を編み出したのは、ごく最近で、しかも、二人同時にテレポトするのは初らしかった

「うあ、あぶなかった、ここで吐いて、かつこ悪い姿をみせるとこだった」

と、まだ吐きたらなさそうに腹をさすりながら言ったタカに

「あれ、ヒロさんは？」と、リコは笑いと心配を含めた言い方をした

「ああ、ヒロなら」

「おまたせ、今日の朝ごはん全部吐いたかもしれない えっと、食パンに目玉や」

「ちょ、やめてください こっちまで吐きそうになる」とあわててヒロの口を塞ぐ動作をした

「で、どうするんだ？」

と、ヒロは俺達は吐きたいたために、ここへ来たんじゃない、異能者になりきたんだと思いいながら言った

え、あ、はい　もう大丈夫なのですね、では、研究員達を連れてきます　少々お待ちください」  
ヒロ・タカ「うん」同時に真剣な顔つきになり同時に答えた

リコが一礼をし、部屋を出て行く

タカとヒロはお互い向き合った

「っで、どんな異能がほしいか考えてるのか？」

タカがヒロの顔を覗くようにみながら言った

「いや、特には、お前は？」

ヒロは顔だけをひきぎみに言い返す

「俺は、パワーアップ系がいいかな？」

と、タカは両手でガッツポーズをする

「へー、でも、もしっば」

とヒロがいいかけたとき　ガチャリ

リコが入ってきた

「では、はじめましょう」

リコが意味ありげな顔をしながら言った

「おう」

と単純に返事するヒロ

「どんな異能がもらえるのかな」

とかなり気にしている

「二人の反応的に、お二方ともOKということですね　では、そこ

に寝てください」

リコが指したのは見た目すごく硬そうな純白のベット

そこに二人で寝そべる

両腕、両足、腹、首は、固定され、視界に赤い光を放つ丸いものが見えた

「少し痛みますが、がまんしてください あと、」  
と、いいかけて、止めた、そして、怖い顔をして、こう言った  
「絶対に、眠ったり、気絶しないでください」  
といった瞬間、先ほどの赤い光を放つ丸いものが、口の中に押し付けられた

瞬間 目の前が真っ暗になった、音がしない、体が動かない、  
ふっ っと、体が軽くなった、そして、腹に ぐっ っと押される  
ような痛みがしたかと思うと

急に目の前に光が現れた 先ほどの研究室のようだ  
なぜかわからないが、すごく息が荒い

「大丈夫ですか？」

リコが心配そうな顔をして聞くと

「あ、ああ」

と、ヒコはよくわからなげに返す

「俺も何とか、」

タカもよくわからなげな顔をしている

「では、二人とも成功です 固定具をはずしましょう」

そうリコが言って研究員に固定具をはずしてもらうと、

ふたりは、それぞれ、よっしゃーと叫んだ

「で、俺達はどんな能力を？」

「まだわかりません 覚醒するには、まだ時間がかかります それ  
まで、休んでいてください」

「そうなのか、」

・ 数時間後 ・

「なんで、（パンツ！）俺達は、（パンツ！）こんなことを、（パ

ンツ！）してるんだ」

ヒロは一回も使ったことなく、よくわからないハンドガン？で向こうにある黒い人みたいな形の黒い的を撃ちながら言った

「なんでだろうな（パパパパパパパパパパ）」

タカも同じく一回も使ったことのない銃を使っていたが、形状が違っていて、連射できるタイプのもので撃ちながら言った

「ヒロの銃は、M500という、リボルバーで、タカの銃は、AUGというアサルトライフルだ」

「そんな（パンツ！）ことを（パンツ！）言われても（カチツ！）わから・・・あれ？」

「（パパパパパパかちちちち）あれ？」

「あれ？ って・・・ 装填数もわからないのか ははは」

と元軍人らしき格好のハゲた・・・いや、スキンヘッドの肌黒い教官は当たり前前のがわからないのかと言うかのように笑っている

「あ、切れたのか」

銃口をみながら、ヒロは呟いた

「M500は5発 AUGは30発だぞ」

と教官が、そんなことも知らないのかと言うつような顔でこちらを見てる

「知りませんよそん、な・・・うっ なんだ、急に、頭が、うっ」

タカは急にフラフラとし始めた

「おい、どうし、うっ 俺もか、うっ」

ヒロもフラフラしはじめた

「小僧共、やっと覚醒するときがきたようだ、」  
教官は、楽しそうにはっはと笑いながら見守る

「く、くそ、はっ!」

倒れそうになったとたん急に頭痛が消えた二人

「よし、覚醒したな、じゃあ、二人にしてもらおうことがある、今の場で」

教官は、少し真剣な目をして、さらに続けて言った

「目を閉じて、心臓に集中しろ、そして、そのまま心臓から下へ下へと意識を集中し、足に行ったら、次は上に向かって手にと、ちよつと難しげな行動をしろと、教官は言うのである

「わかった」

二人は同時に言い始めた。

タカが急ぎ気味で、少し早く、手に意識を集中させたようだ

「その手に集中した意識をそのままに、両手を心臓に重ねると、教官

タカは、言われたままに、両手を心臓まで持ってきて、重ねた、すると、

シュ!

タカが消えた

・・・

「ほほータカは瞬間移動つまり、テレポーターか はは、さて、次

はヒロだが、」

ヒロは今ちようど心臓に重ねたところである　すると  
眩い光が、体全体を覆い、しだいに消えていった

・・・？

なにも、起こらない？

「なにも起こらないだと！？　いつたい、なにが」  
教官はヒロに触りまくると、教官の体から、透明な湯気みたいなものが、ヒロの体に吸い込まれていく

「こ、これは・・・」

異変と共にヒロの能力に気づいたのは、教官だけだった



**覚醒するんじゃない？するのか（後書き）**

こんにちは、オリジナル作品のMW3話書けました888

自分的に、長いを読むより、短くわけたほうが、読みやすいと思  
ったので、短くしてますが、話がなかなか思いつかなくてww

一番悩んだのは、主人公の能力かな？

タカは、なんとなくすぐに思いついた、最強のものとのコラボでテ  
レポーターにしました。そのものは何か気になる方は、次回をお楽  
しみにw

では、次回作を書いていきたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9593w/>

---

ミュータンツ・ウォー

2012年1月4日11時45分発行